朝の柱頭も、ギリシァ風の柱も、ササニド Sassanide 朝の飾すら、その單調を破るものがないのを見れば、他に何とも云ひ樣もないと思ふ。然し、其全景は、往時廣く亙つて住民のあつた事は疑はれないので、粘土の古城壁が氣候の爲に想像も及ばぬ程に切斷せられてゐるが、其周圍は十二キロメートルを降らず、其周圍と共に內側の土地は、到る處塚の凸凹があり、從つて、歷史に關係のある事は考へられるが、價値のない永續しない材料で遺したもので、其結果已に跡形もなく壞られ、それが土壤と全く混じたのである。事實、踏査中で最も重大な點は斯の如きであり、今日まで何處にも石造の建物を見た事はなく、回教徒の墓地を除いては、全然石材がないに至つては遺憾の至である。かくて、今日も猶ほ怠惰を以て知られてゐる住民が、南方三里にあるヒンヅクーシュの石灰石層中に石を求めた事が嘗てなかつたかを怪しむに足るのである。然し、要するにそれは住民の勝手であると片附けて了ふ事は出來ない。住民は石材の建物を造らなかつたにしても、生煉瓦と木材とを用ひて家を造つた爲に、バクトリアのあらゆる建物は崩壞に歸したのである。